みめぐみの

第47部

みめぐみの

第47部

大谷光道著

目次

わかってもらえてる？……2
本山不要!?……3
「ウチは浄土真宗です」……5
お墓が寺になった……8
本山の役割と責任……11
あるお寺で……14
単　立……17
お願い……21
今年から「蘭如會」……22
蘭如上人御祥月……22
歌徳院二十五回忌……23
教如上人四百回忌……24
篤信御門徒追弔会……26
母の思ひ出　大賀美都子……27
読者の頁……29
寺務所からのお知らせ……30
あとがき……31

わかってもらえてる？

お彼岸やお盆が近づくと、「大谷さんはお忙しいでしょう」と、よく言われます。

「いいえ。お彼岸やお盆だからといって、特別忙しいということはありません」と答えると不思議そうな顔をされるので、さらに「寺関係の研修や地方に出かけるので忙しいことはあってもね」と言うと「ああ、そうですか」と。それでも、すっきりとはわかってくださいません。

御門徒の皆さんでも、私の日常や私の居る本願寺のことについて、いつも何をしているところなのか、ご自分とはどんな関係にあるのか、ぴんと来な

い方が結構おいでになるのではないでしょうか。

今日は、そのあたりからお話をいたしましょう。

本山不要!?

「本山」や「本願寺」については、「御真影（ごしんねい）（親鸞聖人のお木像）のおいでになるところ」「年に一度、十一月の御正忌（報恩講）にお参りするところ」というのが、御門徒の持たれているイメージの定番でしょう。

しかし、これほど近くには感じておられない方も多いのではないでしょうか。たとえば、ご

自分が檀家になっていらっしゃるお寺（旦那寺（だんなでら）、菩提寺、手次寺（てつぎでら）。以下「手次寺」）へは、そのお寺のお世話をされたり、その寺の住職や若院（住職後継者）に、お宅までお参りに来てもらったりされて、毎日のように住職や若院の顔を見るという日頃のおつきあいから、ご自分の手次寺とは近い関係にあって、末寺の日常についてはよくご存じでも、「本山には行ったこともないし、何のためにあるのかもわからない」とか、さらに「どこにあるのかも知らない」というように、本山を遠い存在と感じている方までおられるでしょう。

中には、「大切なご先祖のことは手次寺がしてくれるのだし、手次寺さえあれば、何も困ることはない」と考えておられる方もあると思います。こういう方は、本山の機能をご存じでないか、ご存じであってもその機能を誤解なさっているため、「不要」と感じておられるのでしょう。

今日まで、往々にして、本山の機能を明確に示さなかったり、示しながら

も実行してこなかったために、いろいろな誤解や混乱が起こってきているのも事実です。

私どもも、反省すべきは反省して、今後の本願寺のあり方を明確にしていきたいと思っています。

「ウチは浄土真宗です」

さてここで、「本山のことはわからないし、どうでもいい」と仰る方にひと言。

本山のことはわからなくても、ご自分のお宅が代々何宗であるかはご存じであると思います。もし「それもわからない」としても、そのままおいておくには、何か心に引っかかりが残るはずです。大切なご先祖が大切にされた宗旨だからでしょう。そのときは、手次寺の住職に尋ねてみることです。

住職は「ウチは浄土真宗です」と答えるでしょう。では、「何を根拠に浄

土真宗なのか」と聞いてみてください。おそらく「ウチは東だ」、「ウチは西だ」、「ウチは高田本山だ」とか、「ウチは江戸時代、本願寺の〇〇上人の時、上人の弟子だった△△がこの寺を開いたのだ」等々と、住職は説明するはずです。

どのお寺も、本山として仰いできた寺院を持っているのです。そして、その本山はいずれも、親鸞聖人のことを「御開山」と呼び、親鸞聖人が開かれた寺であるという由緒と、それ以降の歴史を明確にしているものです。手次寺の住職は、自坊（自分が住職を務める寺院）の本山がどこであるかを根拠に、親鸞聖人にたどりつき、「浄土真宗である」と、説明するのです。親鸞聖人にたどりつくことで、どなたもほっと安心されるのではありませんか。それは、そこに宗教を感じるからでしょう。「本山は〇〇寺」というのは、宗祖親鸞聖人を感じさせ、皆さんに安堵を与える名前となってきたのです。

そして、「手次寺」とはその名の通り、本山の教えを自らも信奉し、御門

徒にその教えを伝えてきたのです。檀家にお参りしたときにも、また自坊でも、あらゆる機会に御門徒に浄土真宗のお話を聴いてもらってきているのです。

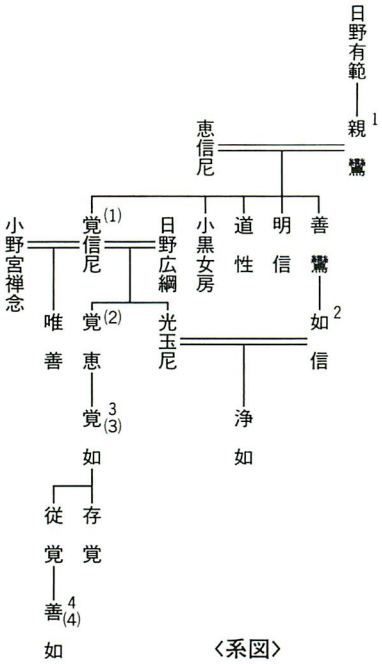
また、「お預かりの御門徒」という言葉があるように、古来、「御門徒はすべて本山の御門徒」という鉄則があります。「御門徒は本来本山の御門徒であって、それを各末寺がお預かりしているのだ」という意味です。教えの上で浄土真宗から離れないように、また御門徒を末寺が私有化しないように、というのが、その心です。

「門徒の私有化」については『御文』（蓮如上人）にも繰り返し諭されているところです。ひと言で言うと、「御門徒をわが門徒と心得てはいけない。親鸞聖人の御門徒であると心得よ」と諭されているのです。「わが門徒と心得てはいけない」というのは、門徒（檀家）は住職の言うことは何でも聞いて当たり前と考えたり、教えについての「私（住職）」の勝手な解釈を押しつけたりしてはならない、ということです。「親鸞聖人の御門徒」とは、親

鸞聖人のお心を正しく伝えるべし、ということです。そもそも親鸞聖人の御門徒だから、単に「門徒」といわずに「御」の字が付いているのです。

さきに、「本山に来て、ご真影にお参りする」と言いましたが、これは御門徒自身の心得として、いつも自分が正しくそのお心をいただいているかを確かめるべし、との趣旨があるのです。

お墓が寺になった



〈系図〉

実は、こうして始まったのが本願寺で、今から七四〇年ほど前のこと、親鸞聖人の亡くなられた後、門弟（もんてい）の方々が在りし日の聖人を偲ぶための廟堂（びょうどう）（お墓の意

味を持つ建物）を建て、そこに聖人の御真影を安置されたことに始まります。ここで「門弟」とは、聖人の直弟子を指し、その後、この系統の方々は、高田派など本願寺とは別の流れとなっていかれました。「門弟」を「門徒」と呼ぶこともありますが、今日で言う「門徒」とは混同しないよう、注意が必要です。

この廟堂を建てるについて中心になったのが、親鸞聖人の末娘にあたる覚信尼公でした。覚信尼公がその夫である小野宮禅念という方から譲り受けた土地を提供し、関東の門弟方の協力を得て廟堂が完成し、これが「大谷の廟堂」と呼ばれ、本願寺の始まりとなったのです。

廟堂を守る仕事を「留守職」と言い、初代留守職に覚信尼公が就かれました。門弟の方々は、廟堂にお参りし、その維持費を運んだりしてくださっていて、覚信尼公と門弟の間には、覚信尼公の子孫を留守職に就けるという約束ができていました。

第三代目留守職の覚如上人（覚信尼公の孫）は、数々の著書を著し、精力的な布教を行い、この大谷の廟堂をたんなるお墓から寺院としていかれました。それが本願寺です。

このようにして本願寺は、聖人を追慕する場所――お墓――と、聖人の教えを広める場所――寺院――の両方の機能を併せ持つようになったのです。

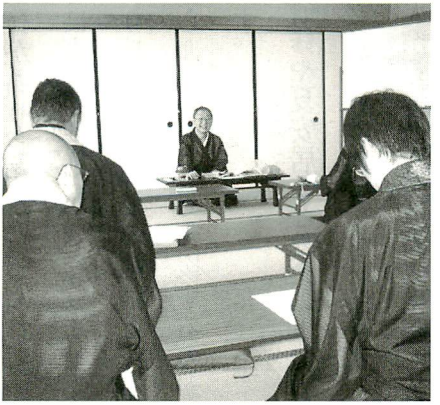
覚如上人は、「三代伝持」（『改邪鈔』奥書）と仰って、法然―親鸞―如信（本願寺第二世）と、浄土真宗の正しい教えがご自身にまで伝えられてきたことを説き、また他流に対しても、教義の上での問題点を指摘するなど、親鸞聖人亡き後の教えの乱れの是正に尽力して、本願寺の教えを盤石のものとされたのです。

それ以降代々、本願寺の法主は「教義と信心の番人」の役目を果たす――間違った教義を唱える者にはそれを改めさせ、間違った信心の人を正しい信心のほうへ是正する――のが仕事となりました。ただ、「番人」とは、比喩

的に言ったまでで、もちろん、何もせず目を光らせているだけという趣旨ではありません。もっと前向きに教化の全責任を持って活動しなければならないのは、言うまでもありません。

本山の役割と責任

「教化の全責任を持つ」とは、全御門徒に対して教化の責任を持つということなのですが、法主が全国においでになる多くの御門徒に毎日接することは到底不可能なことなので、この法主の責任を全国の末寺に分担してもらっているのです。さきに「お預かりの御門徒」について少し触れましたが、それはこのことを言っているのです。



ですから、法主は、預けている責任を果たす義務があり、預かってくれている末寺僧侶のあり方、特に教化に対するあり方に責任を持たねばなりません。

もちろん、末寺僧侶は、自らの努力で日頃より教えについての勉強と作法の研鑽にはげむべきものですが、各方面からあらゆる手だてで支援するのが、法主とその仕事を補佐する本山本願寺の役割です。

それで、住職・若院そのほか僧侶全員に、教学研修や夏安居（げあんご）など教えの上での研修を行って、立派な僧侶の養成に腐心（ふしん）するのが、私どもの仕事です。浄土真宗の教え一般はもちろん、たとえば、先代・蘭如（せんにょ）上人がその是正のために生涯ご苦労になった、「現生往生（げんしょうおうじょう）（『みめぐみの』バックナンバー参照）」という間違った教えに染まらないように力を入れることも、併せて重要です。

よく、僧侶のお勤め（お経、声明）が雑である、下手である、聞くに絶えない、などということを耳にし、その度に私は恥ずかしい思いをしています。伝統の声明や作法を身につけることは僧侶としての必修事項で、そのための

研修も行っています。声明は本来、聴く人に感動を与えずにはおかないはずのものなのです。内容からしても、作られた方の生の御説法――『正信偈』『和讃』＝親鸞聖人、『お文』＝蓮如上人、など――であることももちろんですし、意味がわからなくても、その音楽的つまり歌としての感動が伝わってくるはずのものなのです。

さきにも述べたように、各末寺では檀家・御門徒との毎日のお付き合いが主で、中々勉強にまで手が回らないのも事実で、以上述べたようなノウハウをすべて動員して末寺を応援するのが、本山の義務だと考えています。末寺僧侶が不勉強であれば、それが直ちに御門徒に信仰上の不安を与えることは間違いなく、それに対して本山が無関心でいるようなことがあれば、それは無責任極まりないことです。このことは、少し考えればわかることですが、今日までそれがなされてきたとは、とても言い難いのが実情です。この点を深く反省し、今後の本願寺の指針としていくつもりです。

はじめにも言ったように、本山は末寺のように、個々の御門徒の日常的なお世話はしませんが、その代わりにこのような本山の役割があるのです。「本山が上で末寺が下」とかということではなく、それぞれに役割があり、本末が分業しているのです。そして、本と末、両方があって宗門としての機能が発揮されるのです。末寺の充実こそ、宗門の発展と言えるでしょう。

あるお寺で

先日あるお寺に立ち寄る機会があって、御門徒の幹部男女併せて二十人ほどの方々と懇談する機会を得ました。そのお寺は浄土真宗ではありますが、私共の末寺ではないお寺なので、お話が一々新鮮でした。

その中のお一人が「うちの〇〇寺さえ良ければ本山なんかいらん」と言い出されたので、私は「『いらん』と決めてしまうのは待ってください。とにかくお話を聞いてください」とお願いし、「本山とは……」という話題にな

りました。

なぜ本山が要らないかというと、「本山は取るばっかりだ。持って行くばっかりで何もしてくれない。そんなものはいらん」という趣旨でした。それで、つぎのように、私どもの考えをご説明しました。

「私共のところは、蘭如上人のご遺志を体して、親鸞聖人の正しい教えを正しく広めるのが第一の仕事です。そのためには、りっぱな僧侶を育てないといけません。この頃は新興宗教とかに走る方がありますが、一つには僧侶の質が落ちているからです。『ただ、お葬式や法事の時に来て、へたくそなお勤めをして帰って行くだけだし、教えのことを聞いてもちゃんと答えられない』などと、よく聞きますが、このように僧侶のレベルが下がっています。そもそも、我々僧侶はお葬式をするのが第一の仕事ではなく、一番大切なのは、教えを正しく伝えることで、少しでも明るいお念仏の声が聞こえてくるような寺にするのが仕事なのです。だから、うちでは特に、次世代を担う若

い僧侶をもっとりっぱに育てることが本山本願寺の仕事だと考えています。これをやって初めて本山と言えるのです。御門徒が「取られる」という感覚をお持ちになるのは、何もしてくれない本山だからでしょう。「喜捨（きしゃ）」という言葉がありますが、喜んでお出しくださるのでなければ、「ご懇志」とは言えません」と。

さらに、「私たちの本願寺では「取られた」という感覚でご懇志をお出しくださる方は一人もおいでになりません。皆さんが喜んでお出しくださった、そのお金で土地も買ったし、寺務所も造ったし、そして本堂も造ったんです。嫌々お出しいただいたお金でお御堂を建てたら罰が当たりますよね」と、ちょっと「自慢話」もさせていただきました。

こういうお話に強く共鳴してくださって、「本山なんかいらん」と強硬なことをおっしゃっていた方が、「いや、本山は要る。いや、ないといかん」と、これまた強硬に仰りだして、驚くやら嬉しいやらで、帰途についたしだ

いでした。

このお寺では、御門徒の皆さんがお寺のことにまことに熱心で、寺の将来を心配するあまり、次代を担う若院を育てることには特に目がないなと、強く感じました。

このお話の通りだとすると、このお寺のご本山が末寺にあぐらをかいておられることになるし、そうでなければ、このお寺では「本山の機能」が理解されていないことになります。いずれにしても、他所のご本山のことをとやかく言うべきではないのですが、いま、本山の機能について述べている中で、わかりやすい実例なので、ご紹介しました。

単　立

近ごろ時々、「ウチは浄土真宗で、単立だ」と言い合っている住職たちの話を耳にします。単立というのは、どの本山ともつながりを持たない、その

寺単独で成り立っている寺院のことです。「単立だ」と言うと、どこの縛りも受けず、だれにも頼らず、唯我独尊（ゆいがどくそん）――お釈迦様の故事をひねって、世の中で自分ほどえらいものはないと、うぬぼれること――でかっこよく見えると思っているのでしょう。

さきに述べたように、本山と末寺は、「本山が上で末寺が下」とかというのではなく、それぞれに役割があって分業しているのです。この本と末の両方があって宗門が成り立っているのです。したがって、もし単立でやっていこうというのであれば、今までやってきた末寺の仕事に加えて、本山の仕事も併せてしなければなりません。「末寺のまま本山になる」ということです。

つまり、住職は「法主」の仕事をしなければならないということです。法主とは、浄土真宗の「教義と信心の番人――間違った教義を唱える者にはそれを改めさせ、間違った信心の人には正しい信心のほうへ是正する役目」です。これがないと、正しい教義と信仰が将来にわたって相続されていきませ

ん。もう一つ、自分自身が法主を継いでいる証（あかし）、つまり、親鸞聖人から自分にまで、どのようにして法が伝わったのか（法脈）を、はっきり示せることが必要です。

ちなみに、私の場合は、たまたま先代蘭如上人のご遺志によって、本願寺の第二十五世を継いでいるわけで、法脈については、私自身の能力や徳とは全く無関係に、私は何の努力もせずに証明されてしまっています。また、もう一つの教えの番人については、私なりに精一杯やっていくしかないと心得ています。

さて、「ウチは単立だ」と言っている住職たちの中で、実際に法主の立場を明確にして、そして法主としての仕事をしている住職にはお目にかかったことがありません。「単立だ」と言うのであれば、「私が法主だ、ウチが本山だ」と言うべきところ、そうは言わずに、表向き、檀家・御門徒に対しては「ウチの本山は〇〇寺です」と説明している寺ばかりです。本山がないと御

門徒に安心してもらえないからでしょう。

ところが、「単立なのだから、何をしても自由だ」という考え方が心底にあるため、中には、古来法主のみが着用してきた法衣を着たり、本山のみで行ってきた坂東曲（ばんどうぶし）などの勤行を自坊で行ったり、つまり法主や本山のまねごとをしている人もいます。御門徒は概（おおむ）ね、これらの行いが古来の常識から外れていることをご存じないでしょうから、これらのことを目にされても、「ちょっと変かな」くらいで過ぎてしまっているものと思います。

たとえば、法衣について言うと、浄土真宗では、代々、紫や緋（ひ）は法主とその後継者（新門）のみが使う色なのですが、先日、単立志向のある住職が紫の衣や緋のお袈裟を使っていると聞き、まことに複雑な思いがしました。私が馬鹿にされているような、茶化されているような思いです。これらの法衣について、私はいつも「重いもの――法主の重みを着ている」と感じているからでしょうか。

お願い

以上、私の愚痴も交えて、単立志向の寺院にまで話が及びましたが、我々の本山・末寺において御門徒に安心してお念仏の生活をしていただける環境を調えるのが、私どもの仕事です。私どもの関係寺院には、住職、若院や寺族にやりがいのある寺にしていってもらえるよう、いっそう充実した研修等、サポートの体制を整えて、前進していきたいと思っています。

私は、本来、御門徒のそばにいるのが法主の日常であるべきだ、と考えているので、全国どこにでもいつでも足を運んで、御門徒のお気持ちを伺いに出かけます。もちろん、御門徒の皆さんご自身も、京都・嵯峨の観光をかねて、本願寺に足をお運びください。

また、住職や若院が「本山に勉強に行く」と言えば、留守を預かる御門徒にはご苦労をかけますが、快く送り出してあげてください。

今年から「蘭如會」

蘭如上人御祥月

四月十三日は、本願寺前住・蘭如上人の祥月の御命日です。

本山でも末寺でも、お御堂の内陣に御安置するのは、真ん中が阿弥陀様、向かって右側が親鸞聖人、そして、向かって左側には前門様（ひとつ前の代の御法主）の御影をお掛けするのが、昔からの決まりです。中には本願寺の中興の上人ということで、御歴代の代表と考えて蓮如上人をお掛けすることもあるにはありますが、正しくは前門様をお掛けするのが本来です。

その意味は、私たちに一番近いところで仏様になられた御法主であるという意味で、皆様方が直接教えを受けられた一番近い方というと、やはり前門様です。それで、親鸞聖人の御命日・二十八日と前門様の御命日・十三日、

この二度の御命日を「両度の命日」（両度とは二度のこと）と呼び、本願寺の毎日は毎月この二度のお勤めを軸に過ごすのが、昔からの習わしです。

また、親鸞聖人の正しい教えを正しく伝えるために生涯ご苦労になり、本願寺の移転を悲願としながら御往生になった蓮如上人の御祥月法要なのですから、その御恩に報いるため、今年から「蓮如會（せんにょえ）」と名付ける大法要としていくことになりました。

今年は、御祥月法要を中心に、歌徳院釈如智禅尼（かとくいんしゃくにょちぜんに）二十五回忌、教如上人四百回忌の法要などを勤めます。

歌徳院二十五回忌

今年はまた、母・歌徳院釈如智禅尼（大谷智子（さとこ））の二十五回忌に当たっています。命日は十一月十五日なのですが、時期的に報恩講と近くなるので、半年ほど早めて前住・蓮如上人御祥月の法要と続けてお勤めすることになりました。

また、四月の初めから母の持ち物、特に輿入れの調度品、またその他、思い出の品々を飾って、皆様方に在りし日の母を偲んでいただこうと、準備を進めております。今年も飾りますが、去年はお雛様を飾りました。これは、香淳皇后様とご一緒に誂えられた母のお雛様で、たいへん好評でした。

さらに、母は父（蘭如上人）と共に合唱団「大谷楽苑」に力を入れており、多くの曲の作詞を手がけました。それで、大谷智子作詞の曲を集めて、大谷楽苑に歌ってもらうことになっています。

教如上人四百回忌

もう一つ、今年は教如上人の四百回御忌にも当たっていて（御命日は十月五日）、この三つの法要を続けて、三昼夜でお勤めすることになりました。

教如上人は、東本願寺を創られた、親鸞聖人から第十二代の御法主です。詳しくは『第四十一部』に述べたところです。今から四百年余り前、本願寺が東西二つに分かれたのですが、これはたんに一つのものが二つになったというのではなく、東は東、西は西の特徴を持つに至りました。その特徴の大きな一つは、東は大谷家当主を中心とする性格の強い本願寺で、西は本願寺という寺院を中心とする性格の強い本願寺です（井上豊忠著『宗門時言』）。

親鸞聖人の御真影について前述していますが、私どものところの御真影は、親鸞聖人が自らお造りになって、お弟子の蓮位房（れんにぼう）に与えられたという由緒のものです。それに加えて、代々大谷家の御内仏（おないぶつ）（仏間）に安置されていた御真影で、教如上人が東西分派に当たって、肌身離さずこちらにお持ちになった御木像です。おそらく、東本願寺の系統では最古の御木像です。

ちなみに、この御木像は、平成十一年十月に最高裁で判決が確定し、大谷派から返還された多数の宝物の一つです。下京の本願寺で大谷家の法宝物が昭和五十九年三月、大谷派によって勝手に持ち出され、これに対し蘭如上人が裁判所に訴えておられたのを、私が引き継いだものでした。

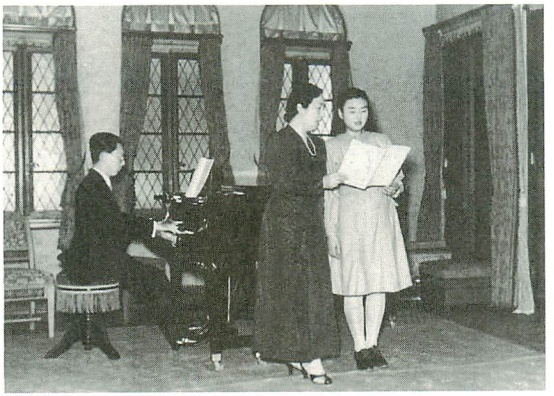
親鸞聖人のお心の象徴である御木像と、教如上人の東本願寺設立のお心を胸に、この法要にお参りいただきたく思います。

篤信御門徒追弔会

前住上人とのご縁から、特に本願寺に絶大なお力を尽くしてくださった山内俊祐さんが、昨年十二月、急逝されました。ここに誌上を借りて、謹んでお悔やみ申し上げます。

今年の蘭如會において、追弔（ついちょう）の法要を営みます。

母の思ひ出



両陛下の御前で

大賀　美都子

母が亡くなって二十五年、私も母の年齢を越えて了ひました。八十歳を過ぎてからは一年々々衰えを感じる毎日です。今一番元気をもらへるのは月三回通っている合唱です。私は子供の頃音楽の時間は苦手でした。それが好きになったのは終戦後両親が創りました合唱団（「大谷楽苑」）でした。もともとクラッシック好きでレコードを澤山集めていた父と音楽学校に行きたかった母が終戦で何もなくなった日本に音楽をとほして布教の一部になればと始めた事だと思ひ

ます。昭和二十年八月終戦になって多分その年の秋頃だと思ひますが佛教讃歌の歌詞を全国的に募集を始めました。澤山の応募がありました。私もいくつか読んだのを思ひ出します。その中から十曲を選び作曲家にお願いして合唱曲を作曲して頂きました。合唱団は昭和二十二年三月に始り私も入れて頂き毎土曜日に練習が始まりました。始めは女声だけでしたが秋頃から男声も加って混声合唱の練習になりました。昭和二十三、四年頃からは地方に演奏旅行にも出かける様になりました。その頃の母との思ひ出の一つに御所で昭和二十四年に両陛下の銀婚式のお祝いがあり母とデュエットをした事です。曲はモーツアルト（ドンジョバンニ）の手紙の二重唱だったと思ひます。今思ふと恥しい様な出来映えだったと思ひますがよい思ひ出の一つです。今銀座で五十人程の集りですが童謡からアリアまで色々な曲を歌っています。何時まで通えるか分りませんがなるべく続けて行きたいと思っています。因みに今讃仰歌はだんだん増え三十五曲になり合唱団は今も弟が続けて月一回練習をしている様です。

読者の頁

感想・意見

愛知県半田市　山戸　辰雄さん

第四十五部を読み返しながら、本願寺様に導きをいただきました事、感謝しております。

今年一月に嵯峨の本願寺を訪問してお話を伺いました事が昨日のように感じられます。

富山県・井波の出身で瑞泉寺で遊んだ記憶も残っており、光道様のおられた事を聞いて重ねて、お導きを感じております。

広島県山県郡　石橋　晃倫さん

宗教とは、主観世界を取り扱うものである、とお示しがあり、なるほどなぁと頂きました。

私たちは、どうしても客観的世界にとらわれてしまうところがあるかもしれません。しかし、本当に問題とすべきもの、解決すべきものは、（人間自己自身という意味で）主観世界にあるのだといただきました。

ありがとうございました。

寺務所からのお知らせ

平成二十五年度本願寺 春の法要『闡如會』厳修

四月十日より十三日まで

【法要時間】

逮夜・14時30分、晨朝・8時
日中・10時30分（13日のみ11時）

○十日 逮夜より十一日日中
歌徳院釋如智禅尼
二十五回忌法要

○十一日 逮夜より十二日日中
教如上人四百回忌法要

○十二日 逮夜より十三日日中
闡如上人御祥月命日法要

・十三日 篤信御門徒追弔会（10時30分）

毎逮夜後（十三日のみ日中後）に帰教式（おかみそり）を行いますので、有縁の皆様とお誘い合わせの上、御参加下さい（要予約）。

《記念行事》

大谷楽苑記念コンサート
『大谷智子を歌う』
4月10日 14時から
本堂（入場料・無料）

歌徳院殿二十五回忌記念展
『大谷智子展』
4月1日～7日
10時30分～16時30分
一階サロン（入場料・無料）
久邇宮家家紋入り調度品
皇室よりの恩賜品
雛人形など

※展示は「闡如會」期間中も御観覧いただけます。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今冬は寒波・大雪と寒い日々が続きましたが、読者の皆様に於かれましては如何お過ごしでしょうか。嵯峨でも少しずつ春の芽吹きが見られます。

さて、前回・四十六部の最後に「本願寺の社会的役割」をお示し下さいました。今回はその続編・詳細編とも言える一編と、今年から始まる「闡如會」の意義とお知らせからなっています。「阿弥陀様と本願」はお休みです。

本願寺の役割については、これまで何度もご教示頂いてきました。今回はさらに踏み込んで、私たち門徒の立場からの疑問や思い違いしてきたことにお答え下さる形で、分かり易く説いて下さいました。

併せて、歌徳院様の二十五回忌を迎えるにあたり、台下のお姉様である大賀美都子様から「母の思ひ出」と題する一文を寄せて頂きました。有り難うございました。

皆様、今年から始まる「闡如會」に是非ご参詣ください。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』１冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい
※送料　1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円
○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です
※送料　5～6冊＝210円、7～9冊＝290円
○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの　第47部

2013年３月５日　印刷
2013年３月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊